第３回秋田県文化芸術推進協議会　議事要旨

日　　時：令和４年１０月１１日（火）１３：３０～１５：３０
開催場所：アトリオン　地下１階　多目的ホール
出 席 者：（会　長）野口裕子
（副会長）片山泰輔
（委　員）齊藤壽胤、三富章恵、藤田ゆうみん、加賀谷葵、池田孝幸、
相原学　　※敬称略
（事務局）（文化振興課）安田課長、成田班長、安田副主幹
（観光戦略課）安達班長
（生涯学習課）黒澤班長
（文化財保護室）伊藤主任学芸主事

議　　題：（１）第３期あきた文化振興ビジョン骨子案について
（２）その他

【発言内容等】
１　文化振興課　課長　挨拶

２　議事
（１）第３期あきた文化振興ビジョン骨子案について

（事務局）
【資料１～３にて説明】

（発言内容）

【秋田県文化芸術推進協議会について】

※委員からの意見や質問なし

【骨子案について】

（片山副会長）
骨子案の主な変更点としては、前回から見やすくまとめる形に変えているほか、基本方針の順番を入れ替えている。これに関連しては、Ａ４縦の資料の体系イメージについても若干の修正が加わっている。
資料では、第３期ビジョンに向けた課題ということで整理されているが、ここで書かれていることは、課題というよりも課題の解決に向けて何をするかということが書いている。

例えば、街の賑わいがなくなり衰退しているというのが課題であって、それを解決するためにミルハスを活用して文化事業をやるということであり、文化財を活用することもそうだと思う。

しかし、今回はこの課題は何であり、何をすべきかということを議論する時間的余裕はないので、この方向で県は行こうとしているから、案で掲げられた基本方針を検討するという整理になるかと思う。

指標については、次の議題としてやるということで、説明が先取りして行われたが、まずは骨子案と体系イメージの議論をするということで、こちらについて、委員の皆様の意見を伺いたい。

（藤田委員）

基本方針を入れ替えた理由は何か。

（文化振興課　安田課長）

県の上位計画である「新秋田元気創造プラン」と並びを合わせた方がわかりやすいと考えてそのようにした。

（齊藤委員）

順番を入れ替えた理由が見易さのためということはよくわかった。そうであるならば、方針に付けている番号は、上から順に重点的に取り組むものではないということか。ビジョンが作られた当初から民俗芸能をトップに掲げ、ユネスコに登録された文化財としての価値を掲げておきながら、今回は最後の方に掲げられている。これには順番を入れ替えただけではなく、何らかの思惑があるのではないかと思う。もう少し詳しく教えていただきたい。

（文化振興課　安田課長）

まず基本方針には番号が振ってあるが、これは施策や取組の重要性によって順番を付けたものではない。しかし、「新秋田元気創造プラン」を策定したときに、ミルハスの役割が秋田の文化の創造拠点、中核拠点であるということで、相当な費用を掛けて秋田市と連携して建てた建物である。よって、このミルハスに対する県民からの期待度というのは非常に高い。

また、県議会からも、ここを秋田の文化を発信する拠点にしてほしいという意見があり、こちらの期待度も高い。文化振興課としても、できるだけミルハスで民謡や伝統芸能の色々な公演などをステージやホールでやっていきたいと思っている。また、広いエントランスロビーがあり、そこには情報発信コーナーを設けているが、そのモニターでも秋田ならではの民謡や伝統芸能の動画を流したりするということを考えている。

よって、この順番が県の施策の重要度を表す訳ではなく、考えを分類するということで分けてはいるが、４つとも相関があると考えている。そういった意味でそれぞれの事業を関連させながらやっていければと考えている。

（齊藤委員）
　今の説明を聞くと、基本方針１の「あきた芸術劇場ミルハスを核とした文化活動の活発化と鑑賞機会の充実」というこの方針がこのビジョンの中心であり、基本方針２～３がこの基本方針１に収斂されるような感じを受ける。そういう解釈でよろしいか。

（文化振興課　安田課長）
　どうしてもミルハスが中心とはなるが、だからといってミルハスばかりやるという訳ではない。先ほどもお話ししたが、ミルハスを動かしていくのは県民の文化活動がベースとなると考えている。それらをきちんとサポートし、目を向けながら県の芸術文化施策を進めていくべきだと思っている。

（齊藤委員）
　説明を受けたが、私はミルハスに収斂されるビジョンだと受け止めている。

（池田委員）
　基本方針の順番は私も気になっていた。説明を受けてそういうものかとも思った。しかし、県民がこの資料を見たときに、「１」が最重要で、「２」「３」「４」と重要度が下がっていくように読まれてしまうのではないかと思うので、このレイアウトについてはもう少し検討いただきたいと思う。それから、例えば基本方針２の施策６では「若手アーティストの発表機会の確保や文化活動への支援」となっているが、前回の資料では「若手アーティスト」と「クリエーター」という２種類の言葉があり、詳細に比較していくと様々な変更が見られるので、言葉、名称を変更した部分の説明をいただきたい。

（文化振興課　安田課長）
　県民が最初に掲げた方針を最も重要度が高いと見てしまうという意見については、確かにそのように思われる可能性はあると感じている。「新秋田元気創造プラン」を策定するときも、ミルハスができるというタイミングだったので、１番目に持ってきたという経緯がある。これについてはご了承いただければと思っている。
　それから言葉、名称の変更については、課内でも悩んだところではあるが、「クリエーター」というと、実際に作品を作る人たちだけではなく、周辺でサポートする、例えば美術の世界ではキュレーターやディレクター、プロデューサーということになると思う。こういった人たちを育てないという訳ではないが、前回の協議会での話しを踏まえたとき、実際に演奏したり、作品を作ったりする人にもう少し焦点を当てた方が良いということで「若手アーティスト」と表現を変えた。しかし、実際にはアーティストだけでは成り立たないものでもあり、公演や美術展などにおけるマネジメントやキュレーション、ディレクターができるような人たちを育成することも視野に入れていかないといけないと思っている。

（齊藤委員）
　伝統文化、伝統文化と繰り返し話しているが、一般の県民から見ると、例えば「アウト

リーチ」や「サポートプログラム」など、そういった言葉を日本語で表現した方が良いのではないか。その方がわかりやすいと思う。やたら英語の単語を入れることで、伝統文化との整合性が無くなるのではないかと思う。

（文化振興課　安田課長）
「アウトリーチ」という言葉は、最近の文化施策の中ではよく使われている言葉である。そうした状況であることから、この言葉をそのまま使わせてもらっているが、この言葉が一般的かというとそうではないかもしれない。だからといって、この言葉に換わる言葉がないということもある。こうした言葉については、例えば言葉の解説や理解の助けになる説明をビジョンの中に入れるといった対応を検討したい。

（片山副会長）
言葉の問題はわかりやすい方が良いということになっているので、検討していただければと思う。先ほどの話の中で、文化振興課は観光文化スポーツ部の中にあるため、観光に力点を置いてやらざるを得ないという話しがあったが、配布されたビジョン案の基本方針や施策を見ても、あまり観光振興を強調したような項目はないと感じた。基本方針３には「観光分野と連携した」と書いているが、観光の面をどうやって取り上げていくのかということはあまり言及されていない。この点についてはこれでいいのか。観光の扱いをどのように考えているのか教えてもらいたい。

（文化振興課　安田課長）
観光といっても、こちらで考えているのは、文化芸術の魅力、資源を活かしながら、観光と連携して交流人口の拡大に結びつけていく、繋げていくということを考えてこのビジョンには盛り込んでいる。そうはいっても、文化の力というもののベースがしっかりしていないと魅力に繋がらないし、人を呼ぶこともできないと思う。そうした土台となる部分をしっかり作っていきながら、観光分野とも連携していくという考えでビジョンをつくっている。観光を前面に打ち出したつもりではあったが、こういった構成でビジョンをつくることで、文化振興課としては役割を果たしていると思っている。

（片山副会長）
観光は文化振興課とは別な課で所管していると認識しているが、秋田県の観光政策がそもそも何を目指しているのかというところを少し整理し、そこと文化との関わりをもう少し交通整理をした方が良いと思う。その取組によっては、儲かることが大事なのか、お金にならなくても交流がしっかり行われ、相互理解が進むことが大事なのか、何を観光自体に求めるのかによって、文化がどの局面で関わるのかが変わってくると思う。その辺を整理した上で説明していくと良いと感じた。

（藤田委員）
基本方針の順番が数字で「１」「２」「３」「４」とあると、やはり優先順位のように思われるのではないか。数字ではなく、「Ａ」「Ｂ」「Ｃ」「Ｄ」でも良いと思う。こういっ

た案をつくる場合は数字が基本なのか。「Ａ」「Ｂ」「Ｃ」「Ｄ」であれば、数字とは違った受け止め方をされるのではないかと思う。いくらレイアウトを変えても数字であることは変わらない。その辺を検討してもらえればと思う。

（文化振興課　安田課長）
　多くのプランというものは数字で順番を付けているが、その数字はナンバリングという意味合いかと思う。「Ａ」「Ｂ」「Ｃ」「Ｄ」と表記すること、あるいは番号を振らないということが可能かどうか課内で検討してみたい。他のプランでは「１」「２」「３」「４」とナンバリングしているので、番号をとってしまうとわかりにくくなることも考えられることから、その辺も含めて検討してみたい。

（相原委員）
　先ほどの説明では、番号は振られているけれども、「甲」「乙」「丙」といいますか、優先順位は無いということであった。他の委員の方々の気持ちもわかるが、上位プランである「新秋田元気創造プラン」の文化芸術に関する施策の一番始めにミルハスが載っている。よって、来年度から始まるビジョンであれば、ミルハスは一番であるべきだと思う。

（齊藤委員）
　基本方針には順番みたいなものがあるかもしれないが、施策にも番号が振られていて、これを見るとどうしても優先順位だと思ってしまう。例えば、施策全体に一連の番号を振るのではなく、基本方針毎にその都度、施策１から番号を振り直せば良いと思う。

（野口会長）
　このビジョンの表現というのは、誰が見ることを想定してつくっているのか。細かく、何も漏らさないようにしようとしてつくられていることは痛いほどよくわかるが、具体的に書けば書くほど、色々なところから違うという反発が出てくるような気がする。これを読む人が、文化に関わっている人だけということでつくるのか。わかりやすいということで言えば、日本語で表現してもらった方がわかりやすいと思うし、今の時代で使われている言葉だというと格好が良いが、あまり分類しすぎると先ほどの「クリエーター」や「アーティスト」といった話になり、議論の時間が足りなくなるということだと思う。ケチを付けるつもりはないが、どうやったらわかりやすくなるのか。

（文化振興課　安田課長）
　この骨子案は県民にわかってもらうということが前提である。議会に説明する際に、議員にとってわかりやすくということではなく、県民にとってわかりやすくという意識でつくっていたつもりである。しかし、委員の方々の話を聞いて、わかりにくいのだろうと感じた。今後、成案を作成するに当たり、言葉の使い方に気を付け、実際に文化活動をされている方たちが読んでわかりやすいようにつくっていきたいと思う。

（片山副会長）

今後はその辺も含めてわかりやすく文章をつくり、定義も含めてやっていただけたらと思う。

【指標について】

（片山副会長）
これまで秋田県の文化政策では指標設定とそれに基づく評価が行われておらず、今回初めて指標が設定されたということだが、最近はどこの自治体も計画策定に当たっては指標を設定するということで取り組んでいる。
ありがちなのが、入手しやすい指標を並べただけで、本当に目標が達成されたか評価できる指標になっていないということが多い。例えば、文化の普及をしていくと言いながら、自治体が直営でやっている事業の入場者数をカウントしているだけといったものや、いつも同じような人がリピーターとしてくるだけで数値は伸びるので、そうすると全然来ないような人は把握されないということになる。基本方針を定めたら、それを測る指標として何が適切かということを考えていくことが大切である。指標といっても、こういう指標がほしいといってすぐにデータが出てくる訳ではないので、そういった調査ができるのかどうか。そういったことと併せて考えなければいけない。今回は取り敢えず、入手可能な指標を並べたということかと思う。
冒頭で挙げた全体指標というのはとても大事なもので、最初に課長が基本目標の達成状況をこれで見るという話をしたが、基本目標とはまた別な次元のものだと思う。県民に対する文化権の保障として、ミニマムなものとしてやらなければいけないのが全体指標であり、基本目標をどうするのかというのはもっとしっかり議論した方が良いと思う。「秋田の元気を創造する」という状態がどういう状態なのかしっかり議論をして、それを測るのにどういう指標が必要なのかということを考えるのが大事だと思う。
まずは今回提示された全体指標と基本目標毎の指標について、委員の方々からの質問、意見をいただきたいと思う。

（齊藤委員）
指標の調査をアンケートで行うにしても、大雑把なものしか出てこないのではないかと思う。もう少し別な方法があるのではないか。指標の設定は今回のビジョンで初めて行うということであるので、これはこれで新たな方式としてはいいのかもしれない。この調査というのは大変有益になるものだと思うが、その掲げている目標を見ると、芸術を鑑賞している人の割合が令和３年は４０％の実績となっている。それが令和５年は３７％という目標を立てているが、ビジョンを掲げてやるのであれば、目標は１００％でなければいけないのではないですか。それが結果として５０％になるのは仕方がないとしても、目標を掲げている以上、１００％にしないと一体何のためのビジョンなのですかということになる。
それから、基本方針4の目標である「文化事業への来場者数」は、令和５年度の目標値が２７万人、「ブンカＤＥゲンキのページビュー数」は１１万という数値であるが、この数値は累計ではなく単年度である。この数値が達成されるのかどうかというのは色々検討

してみなければいけないと思っている。
　基本方針３の目標「国・県指定等文化財の件数」は令和５年度が７８８件、６年度が７９１件、７年度が７９４件となっているが、これは文化財の指定件数を年々増やしていくということなのか。その点で後継者の育成の問題と文化財の消滅ということもあるので、この目標の設定について詳しく説明していただきたい。

（文化振興課　安田課長）
　文化の施策がどれだけ効果があったかを測る指標を探すというのは大変難しく、文化芸術を鑑賞している人の割合や活動している人の割合というのは、県で実施している県民意識調査の項目として挙がっている訳ではない。これについては、来年度にアンケート調査を実施して把握することを検討しているが、２千人ぐらいの母数で実施したらある程度精度は高いのではないかと考えている。
　１００％の達成率を目指すべきではないかとの話があったが、正にその実現を目指してやっていきたいと思っている。しかし、１００％が３年間続くというのもなかなかハードルが高く、まずは少しずつ増やしていくということでこの数字を設定している。事業を遂行する上では、１００％の実現を目指して実施していきたいと考えている。
　基本方針４の「文化事業への来場者数」の目標値については、新型コロナウイルス感染症の影響も大きく、令和３年度は６９，９４７人だったが、令和元年度の来場者数はもっと多く、４５万人ぐらいであった。それが令和２年度になると、５４千人くらいにまで減った。令和４年度は新型コロナウイルス感染症の収束を見込んで少し数値が上がるだろうと想定して設定しており、令和５年度以降は徐々に回復する前提で数値を積み上げていったところである。
　基本方針３の「国・県指定等文化財の件数」の目標値については、上位計画である「新秋田元気創造プラン」との整合性を図るという観点から、その指標で良いのではないかと考えた。この指標には有形・無形が両方入っていること、登録分も入っていることで、広く文化財に関するデータを拾うというところで、文化の継承と発展、創造を測る指標としてふさわしいのではないかということで選んだ。

（三富委員）
　指標と基本目標の関係について、片山副会長から全体指標は県民に対する文化権の保障という話があり、そういった視点があるのかと私自身勉強になった。私自身の解釈としては、基本指標と全体目標との接続に関する説明で納得感を得ていた。というのも、私自身の理解として、「地域の文化力を高める」というのがどういう状態なのかというのが、鑑賞者が安定的に増えていること、活動者が増えていることと定義されたので、それが達成されることで文化の力で秋田が元気になっているということを示そうとしているんだと捉えた。「文化の力で秋田を元気にする」というのは、例えば文化芸術基本法の前文にあるような、文化芸術というものが心豊かな活力ある社会の形成に極めて重要な意味を持ち続けると書かれていることを考えると、納得できると思って受け取っていた。
　一方で、ここまでの指摘の中でいくつか話があったように、どのようにしてデータをとっていくのかという問題がある。もしアンケートとするのであれば、やはり設問の立て方

というのをかなり工夫しないといけないのではないかと思う。鑑賞している人の部分はわかりやすいと思うが、活動を行っているという部分については、極端に数字が落ちてしまう懸念があるのではないか。また、ランダムに２千人を母数としてとっていくというが、恐らくコストも掛かることであり、それを毎年度続けるのかといったところも含めて、改めて検討されてはどうかと思った。

それから、こういった指標もあった方が良いのではないかと思ったのが、指標の資料の２ページ目の基本方針２のところで、私自身が関連のある方々と仕事をする中で、申請をして参加をするだけではなく、その後どうなっているのかといったところがかなり重要なポイントだと思う場面に接することが多い。特にアーツ・アーツ・サポートプログラムに参加された美大の関係の方や、具体名を挙げると、尾花賢一さんというアーティストがその後ＶＯＣＡ賞を受賞し、今や地方の数々の芸術祭に呼ばれたり、大きな美術館で個展をするまでに成長している。そうなるに至る過程で、アーツ・アーツ・サポートプログラムが一つの転機になっていたのではないかと思っている。数値だけではなく、そういった個別の具体例をどうやって拾っていくのかということが、指標の話とはずれるかもしれないが成果を測る上で重要ではないかと感じた。

（文化振興課　安田課長）

確かにアンケートの場合、設問の立て方に工夫が必要だと感じている。そこは気を付けていかなくてはいけないし、コストの面でもこれから予算要求をしていくが、予算が取れない場合はどうするのかということもり、その場合は文化振興課で行う事業の中で、アンケートを実施して回収するという手法も考えている。

指標２の後継者や若手アーティストの育成と活動支援のところで、支援をした方々がどうなっていったのかという事例で尾花賢一さんの話をしたが、県の事業では尾花さんに個展をやっていただいた。その後の活躍はとても嬉しいことだが、こうした個別の具体例というのはアンケートで拾えない部分である。こうした定性的なところについて、どのように成果を蓄積し、見える化していくのかというところが大事だと思うので、これから考えていきたい。

（片山副会長）

基本方針１のところで、ミルハスは県としての思い入れがあってやった事業だと思うので、しっかりと実績を把握した方が良いと思う。事業を何回やったのかというのはすぐにとれるデータなので、これはこれで把握すれば良いと思うが、やはり県民の鑑賞機会の充実に繋がったのかどうかというところをしっかり把握する必要があるかと思う。

私の大学がある静岡県では、定期的に文化に関する県民意識調査というのをやっていて、その中で県立の施設、例えば県立美術館や静岡県舞台芸術センターなどいったところの認知度と参加経験を必ず尋ねるようにしている。そしてそれを地域別に集計する。静岡県は広いので、東部、中部、西部と分ける。すると地域毎に差が出てくる。秋田県も広いので、やはりミルハスができてその認知度と実際に行ったことがあるかなど、色々な期待や認知度などを調査した方が良いのではないかと思う。

そうした調査をしていく中で、県の事業の効果を確認していくと、県民の鑑賞機会がど

うなっているのか、恐らく地域格差が出てくると思うので、そういったところで課題を見つけていくのが良いのではないかと思う。経費は掛かるが、基本的なデータはとった方が良い。

それから文化財のところでは、指定件数を増やしていくという自治体は結構多いが、ただ新しいものを増やしていけばいいのかというと必ずしもそうではなくて、今指定しているものがしっかりと保存され、県民に認知されているというところが重要なのであり、そういったところをしっかり確認していく。また、ネガティブ指標というものもあるが、伝承が難しくなったものをゼロにしていくという目標の立て方もある。特に無形のものなんかは、伝承が難しくなるものも出てくるので、そういった指標を立てるというのもありだと思う。

基本方針４の交流人口のところでは、来場者の総数ではなくて、県外から来ている人や初めて来た人など、そういう指標で見ていかないと、単なる愛好家が来ているだけでは例え来場者がどんどん増えたとしても、交流人口の拡大には繋がっていないということになる。よって、アンケート調査の中ではどこから来ましたか、初めてですか、といったことを聞き､それを全体の数字に掛け合わせることによって推計することができるようになる。何を知りたいのかということに合わせた形で予算化することは大変だと思うが、こうしたやり方で調査することにより、事業が順調に進んでいるのかといったことを把握できるようになるのではないかと思う。

（齊藤委員）

文化財の指定については私も長く関わってきたので、副会長の話とは逆行するかもしれないが文化財の指定は点数制である。国から補助の条件が何点というようになっているので、件数が増えれば増えるほど国からの補助金が増えるということが今まではあった。

ある某県の知事は文化財は余り指定するなと言っていた。県指定にすればお金が掛かるからという。これは博物館のリニューアルの問題にも絡み、そういったところに理解がなかった。当時はそうだったが、私は文化財はどんどん増やしていくべきだと思っている。こういう時代であるからこそ、付加価値を付けるような、あるいは県民にとっても精神的な財産になるようなものだと思う。世界遺産であれば国にとっても、世界の人にとっても精神的な財産となる。秋田県にはまだまだそうした文化遺産が豊富にあると感じている。指標の目標には１年で３点ずつ指定文化財が増えていくという目標が掲げられているが、後でこれを評価するとき、指定された件数の達成だけで良いのか。せっかくビジョンを掲げて指定件数を指標とするのであれば、私はもっと指定件数を増やしていけばいいのではないかと思う。

指標と評価の問題については、県の施策として掲げられている以上、数字がモノを言うことになる。よって、予算化をしてアンケートをとるなど、指標の評価をするためには大事なことだと思う。しかし、文化振興の目的というのは、いかに県民が民度を高めていくのかということにあるのではないかと思う。こうした民度を高めていく上で、文化芸術というのは欠かせない分野であろうと思っており、こうした大きなビジョンを立て、これから秋田県の資質を高めていこうということになると思う。それを評価するのは、議論されているようなアンケートだけではなく、もっと別な方法も取り入れるべきではないかと思

う。例えば、施設内で立ち会い、来場者の表情を見るだけでもいくらかわかると思う。文化財の中でも国宝のようなものを県民に見ていただくというようなことをやることで、文化財への関心も高まり、目標を掲げた上での成果ということも出てくると思う。アンケートだけではなく、数字以上の別のものを掲げて評価してもらえればと思う。

（片山副会長）
　目標に掲げられている文化財の件数については、県民の方々が登録文化財を増やしていくということもあるので、これからどんどん増やしていけば良いと思う。

（藤田委員）
　三富委員が言ったように、指標の考え方というのが、第３期ビジョンの基本目標と合致していると納得した。次回もこの指標の考え方を基に、この基本目標の「地域の文化力を高め」ということを議論できたらと思っている。
　また、アンケートの取り方についても、既に鑑賞した方や参加した方からも積極的に声を聞けたらと思うし、それ以外の方については、ミルハスの認知度を含めて聞いていくことが大事なのではないかと思った。
　一つ気になった点は、基本方針3の指標、数値について、ここだけ実績が令和３年度の７８７から目標の７８５とマイナスになっていること。他の指標と同様に、県の元気創造プランから引用されているということは理解できたが、やはりマイナスになっているとどうしても矛盾を感じてしまう。

（文化振興課　安田課長）
　今回の基本目標については、後で委員の方々に改めて意見を伺いたいと思っている。アンケートの件は、当課で様々な事業をする時に事業に参加した人から回答してもらっている。その機会を利用して、ミルハスの認知度を測るような項目を入れるというのが良いのではないかと感じた。例えば、県で主催したミルハスでの事業でそういったアンケート調査を実施するなど。

（文化財保護室　伊藤主任学芸主事）
　令和３年の時点で、文化財は民俗芸能や建物だけではなく、動産、美術工芸品も扱っているためどうしても売買がある。秋田県指定の文化財というのは、所有者が県外の人になると自動的に解除となって件数が減る。令和３年の時点で売買によって指定が解除されるということが３、４件ありそうだということがわかり、それを見越して目標を立てた。しかし、令和３年の実績のところでは目標が７８５だったが、実際は売買されず、県外の方が県に寄贈するという形で残ったということがわかり、そこだけいびつな数字になっている。それ以後の目標は増やしていくことにしているが、先ほども片山副会長からご指摘があったように、この件数の中には指定文化財だけではなく、もう少し規制が緩い登録文化財というものも含まれている。

（藤田委員）

アンケートについて、既に鑑賞した方やアーティストなどとして参加した方から取ることにより、既にターゲッティングされた方々に意見を聞くことができ、とても効率的だと思っている。
しかし、そうすると普段、文化芸術に触れていない人にフラットにミルハスの認知度などを聞くことができなくなるので、これとは別に、無作為なアンケートというのはやはり必要になると思った。

（加賀谷委員）
ダンサーとしての視点から、私がこの協議会に参加するということを周りの人に話したとき、この文化振興ビジョンというものを知っている人が余りいなかった。私自身も全然知らず、このサポートプログラムも今年初めて知ったくらいである。
私の周りのアーティストたちも、県の補助金や様々な支援を活用している人が少なく、それは何故かと考えたとき、芸術文化協会や美大に関わっていなかったりすると、そういった情報が届かないことにあると気付いた。そうした状況でアーティストたちが支援されるにはどうしたら良いかと考えたとき、色々な県のデータを調べると、そもそも現状がわかるデータが余りない。例えば、アーティストがこれぐらいいるなど。私が見つけられなかっただけかもしれないが、そういったデータがきちんとあれば、新しいことも考えていけるようになると思う。難しいことはわかっているが、そこにお金を掛けていただけたらありがたいと思う。

（文化振興課　安田課長）
県内で生業としてどれくらい芸術活動をされている方がいるかということを把握するのは難しい。しかし、話を聞いていて、行政側の情報発信の仕方にも課題があると思った。秋田県には「ブンカＤＥゲンキ」という文化情報発信サイトがあり、このアーツアーツサポートプログラムの情報もそこに載せている。けれども、その情報まで辿り着くことができないアーティストが多いと感じた。例えば、文化庁でも色々な助成制度はあるが、そういった情報もアーティストにまで届いていないのではないか。アーティストにそういった情報が届くような、情報発信の工夫が必要だと考えている。

＜その他＞
（齊藤委員）
観光とビジョンの関係については、充分に検討すべきだと思う。文化財には有形、無形とあるが、かつて「お祭り振興法（地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律）」というのがあり、特にお祭りに関わるような民俗芸能においては、観光との関係が大変議論されてきたところである。法律が改正されて観光と一緒に振興するようにとなっている訳だが、民俗芸能をパフォーマンスとして具体例に挙げて、果たしてそれが観光になるのかと思う。そういうことが進められると、これが一つの実績となり、今回のビジョンの目標が達成だ、集客がどうだという話になるため、私は文化芸術の振興とは全く整合性がとれていないと思う。目標とは全く違うところにあるのだと思う。観光との関係は、昔のビジョンでも示されているように、１１ある施策の

中でも個別に検討していくべきだと思う。

２　その他

（事務局）

【書面による意見、質問の提出、修正後の骨子案の取扱い、今後のスケジュール等について説明】

※委員から意見や質問なし